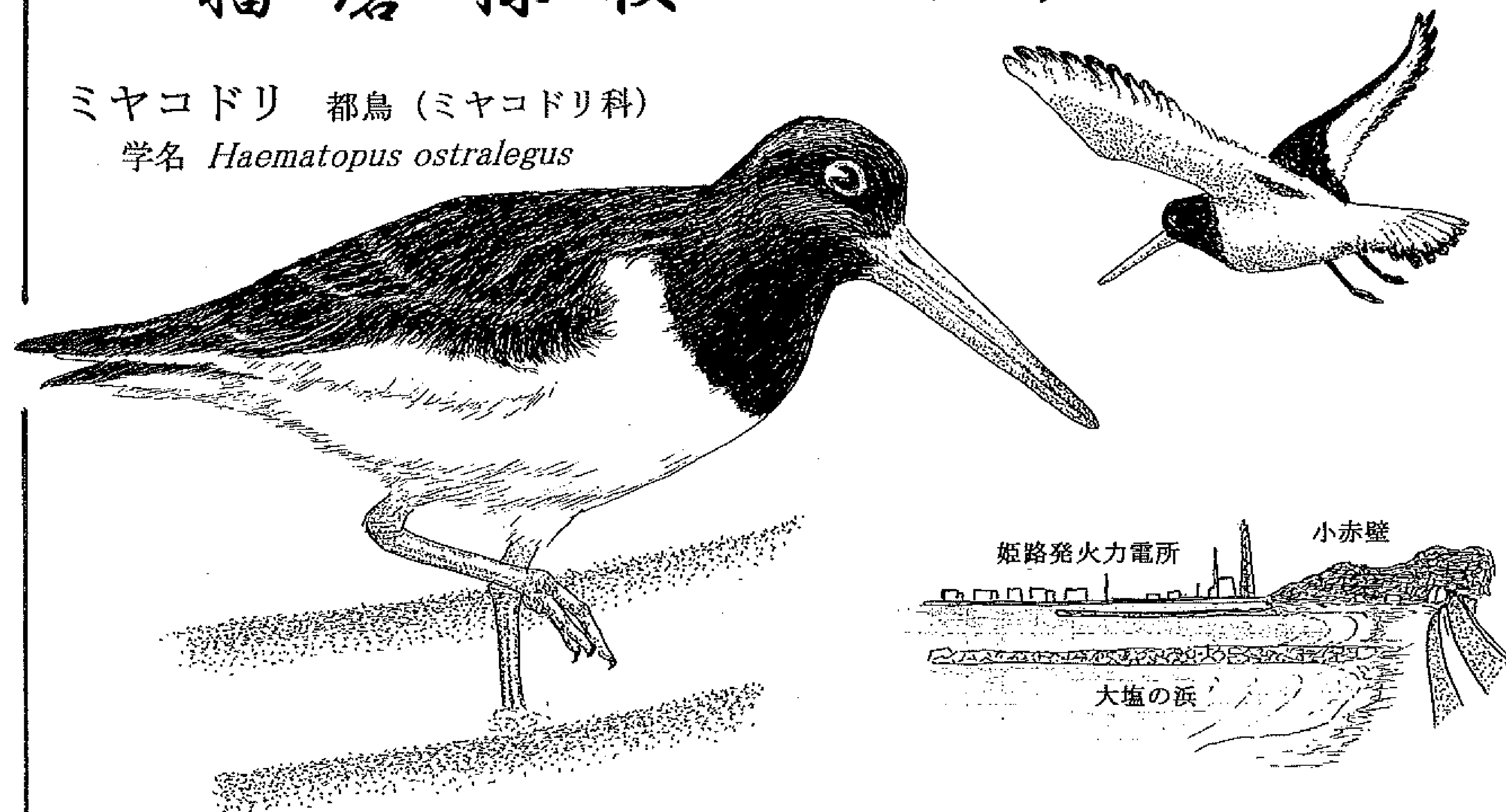


ミヤコドリ 都鳥 (ミヤコドリ科)
学名 *Haematopus ostralegus*



冬休み明けの連休、朝早くに姫路市東部の大塩の浜を訪れた。引き潮に合わせて潮間帯の生物や漂着物を調べるためである。秋から何度も浜に来ているが、貝やカニ、ナマコや海藻などがほとんど打ち上げられておらず、生き物の気配がない。水は非常によく澄んでいるが、波打ち際を歩くと微かにドブのような腐敗臭がした。海の中で何かよろしくない状況が発生しているのかもしれない。それでも今回はナマコを大小二匹拾うことができたので、晩酌の友とした。帰ろうとして干潟に見慣れない鳥を見つけて写真を撮った。カモメかと思ったが、背面が黒く腹が白で嘴は赤く良く目立つ。初めて見る鳥だった。

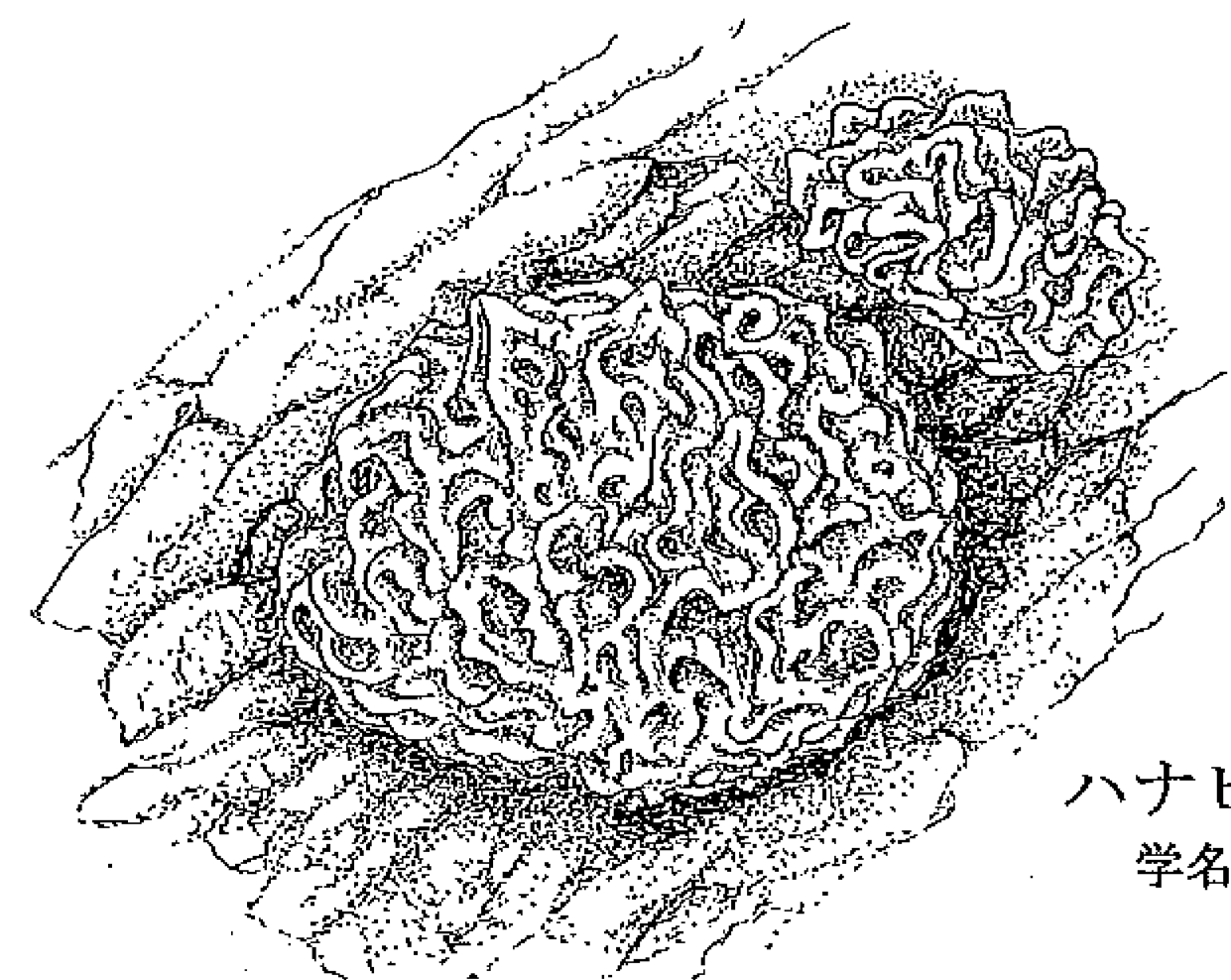
家に帰りピンボケの写真をもとに調べた所、チドリ目のミヤコドリであるとわかった。中世の和歌に詠まれたミヤコドリはユリカモメのことであるらしいが、それではなく本家本物のミヤコドリがいるということ、不覚にも私は知らなかった。

長い嘴で砂浜の二枚貝をこじ開けたり、岩に付いたカキを剥がしたりして食べるらしい。英名は Oystercatcher オイスターキャッチャー (カキ捕り) である。ミヤコドリは日本には冬鳥として大陸から渡ってくる。東京湾沿岸で見られるが、それ以外の地方ではかなり稀であるらしい。「この播磨での発見はひょっとして相当レアなのかも！日本野鳥の会に報告すべきでは？」と思い、さっそく野鳥の会兵庫支部へ FAX で情報を送った。

翌日、クロナマコやヒトデ、ヤドカリなど前日捕獲したが食べなかったモノたちを海に帰すために再び大塩の浜を訪れ、波打ち際を飛ぶミヤコドリを見つけた。白と黒のツートンの翼を広げて飛ぶ姿が美しい。昨日の個体かどうかはわからない。他の鳥の姿もなく、生き物も少ない寂しいこの浜でミヤコドリは食べ物を得られたのだろうか。

チドリ目の鳥にはチドリの他カモメやシギなど、海辺に棲む多くの鳥の種が含まれる。かつて播磨の沿岸は白砂青松の美しい砂浜が続き、生き物の豊富な干潟はチドリの仲間の楽園だった。母校の小・中学校はチドリが校章だった。しかし 1960 年代にはほとんどが埋め立てられ工業地帯になった。わずかに残った干潟を野鳥や多くの生き物のために大切にしなければならぬ。

キノコ探究の果てしなき道



キノコバエ?
の幼虫 7mm



味噌汁で喫食

ハナビラニカワタケ (シロキクラゲ科) 花卉膠茸
学名 *Tremella foliacea*

12 月最初の土曜日、高砂市北部にある市ノ池公園を訪れた。すっかり冬の景色に変わった雑木林では野鳥が盛んに鳴き交わしている。かつてカスミサンショウウオの卵塊やオニヤンマのヤゴが見つかった砂防ダムの池は数年前から干上がり、生き物の姿はない。夏にはクワガタなどが見つかるコナラ林もひっそりしている。枯れて倒れたコナラの木に見慣れない塊がついていた。茶色の花びらが密生したようなそれは、触れると柔らかくしっとり湿っておりキクラゲのようでもある。図鑑で見たことがあるハナビラタケとかいうキノコに似ている。今回は慌てず、まず写真を撮ってからそっと剥ぎ取り持ち帰った。

調べたところ、ハナビラタケ科のハナビラタケに似ているが、これはシロキクラゲ科のハナビラニカワタケであると分かった。図鑑の写真と比べると、少し乾燥して縮んでいるためにやや見かけが異なっている。食べられるということなので、さっそく茹でることにし 4 つに切り分けた。ところがその断面には、7mm 程の白いイモムシが複数見つかった。「Oh my god! キノコバエが付いている。無念」仕方なく流しの生ごみ入れに廃棄した。

キノコバエの幼虫は食べても全く害は無いが、やはりキモチワルイ。だがキノコバエの幼虫が付いたキノコを食べるか、捨てるかの判断基準はハナハダ曖昧である。アマタケなどはたくさん採れた場合、キノコムシが複数付いたものだけを廃棄する。しかし松茸なら 10 匹付いていても躊躇なく食べる (食べた)。今回のハナビラニカワタケは私のキノコ実食研究において 20 種目となる記念すべき獲物なので、やはり食わねばと思い直した。

いったん捨てたキノコを取り出し、薄い塩水につけて虫出しをする。1 時間ほどすると、容器の底に白い幼虫が 10 匹ほど沈んでいた。さらに襲を広げながら水洗いし、残った幼虫を摘みだす。それから湯を沸かして茹でた。茹でるとかなり色が薄くなった。鍋の底には数匹の虫が死んでいる。再び洗って虫がいなのを確認して味噌汁に入れて食した。このキノコには全く味が無い。キクラゲより柔らかく、薄っぺらなコンニャクのような食感である。「これは酔の物や吸い物で食うべきなり」ということで残り半分を冷凍保存した。

別に食べなくても飢えることは無いし、そんなに旨くもない。食当たりの危険もある。場合によっては命懸けである。「なのになぜ、何を求めて〜、君は野生の、キノコを食うのか〜♪」と若者たちの節で尋ねる人もいるが、登山家ジョージ・マロリーの格言「そこに山があるから」のように、「そこにキノコがあるから」というわけでもない。「タダだから」という即物的な考えでもない (ややそうかもしれないが)。やはりこれはヒトをここまで進化させた、自然への飽くなき好奇心と揺るぎない科学的探究心がもたらす行動なのである。